大阪文化財センター調査報告集Ⅲ

文化財調査報告集'75(Ⅱ)

財団法人 大阪文化財センター

大阪文化財センター
蔵書
第3387号

はしがき

財団法人　大阪文化財センター
理事長　加藤　三之雄

大阪文化財センター調査室に於ける昭和50年度の調査事業は、埋蔵文化財の試掘調査を7件、分布調査を2件実施いたしました。それぞれの調査は開発主体者の依頼を受けて実施したもので、開発工事が予定されている地域であります。従いまして調査も遺跡の実態を把握するための基礎資料を整えることを主たる目的にしたものであります。

それぞれの遺跡は、大阪府教育委員会との協議を経ていずれ本調査や開発工事が実施され、地上に痕跡を止め得なくなると予想されるものでありますが、遺跡が調査後破壊されるといった行政処置を受ける場合、できるだけ公開性を旨とすべきものでありましょう。かかる意味で大阪文化財センター調査室では、調査報告集を公刊してまいりましたが、このたび昭和50年度実施調査の報告集を刊行するはこびとなりました。大方の批判を望むものであります。

昭和51年5月

文化財調査報告集'75

目　　次

1．大阪府道高速大阪松原線建設に伴なう瓜破遺跡試掘調査報告書

2．都市計画道路貝塚中央線建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書

3．大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書

4．泉南郡阪南町鳥取地区埋蔵文化財分布調査報告書

大阪文化財センター
藏　書
第 3387号

大阪文化財センター調査報告 XVIII

大阪府道高速大阪松原線建設に伴なう
瓜破遺跡試掘調査報告書

昭和 51 年 3 月

財団法人 大阪文化財センター

はしがき

財団法人　大阪文化財センター
理事長　加藤　三之雄

埋蔵文化財の発掘調査は、最近その件数に関しては、昭和20～30年代のそれとは比較することすら出来ないほどに激増しておりますが、これらの調査の大部分が破壊を伴なう緊急発掘調査で占められていることは嘆かわしい事実であります。

科学的、学術的な発掘調査は、本来充分なスタッフと問題意識を持ち、加えて余裕のある時間をかけて、必要に応じて必要最小限の面積を調査するものだと考えます。

そういった意味では、今回試掘調査を実施しました瓜破遺跡は、昭和27年に日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会が独自の問題意識をもって計画的に発掘調査を実施した府下の弥生時代を中心とする代表的な遺跡であります。

ここに報告する大阪府道高速大阪～松原線建設予定地内瓜破遺跡試掘調査は、当該遺跡の実態を正確に把握し、基礎資料を整備する目的で行なったものであります。

調査期間中、多大の援助を賜わった阪神高速道路公団第一建設部の関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、厳寒にもめげず、調査に積極的に取りくまれた調査関係者諸氏に深く感謝する次第です。

昭和51年３月

例　　言

1）本冊子は、財団法人大阪文化財センターが阪神高速道路公団の委託を受けて実施した大阪府道高速大阪松原線建設に伴なう瓜破遺跡試掘調査報告書である。

2）調査に要した費用(¥4670,000)は全べて阪神高速道路公団が負担した。

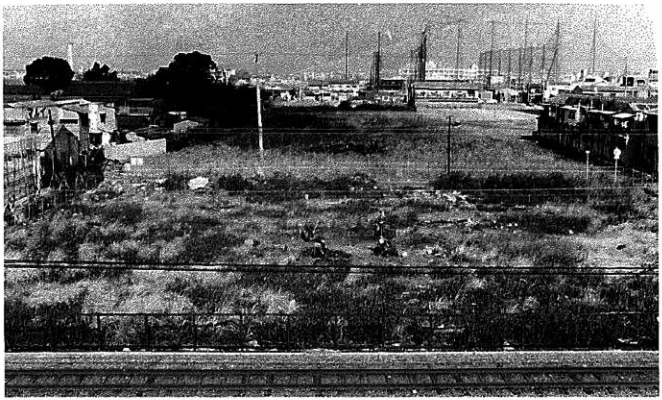
3）調査は、財団法人大阪文化財センター業務課調査室が担当し、昭和51年1月10日から同年3月20日までの間実施した。

4）現地に於ける発掘調査は、調査室長中西靖人の指示のもと、調査主任国乗和雄が担当し、昭和51年1月16日から同年2月12日までの間実施した。期間中、調査員として赤木克視、寺川史郎の諸氏の援助を得たほか、木村宏史、尾下守弘の諸君の協力を受けた。

5）出土した遺物及び図面の整理は、同じく中西靖人の指示のもと赤木克視、山崎博、朝井文子が行ない、昭和51年2月9日から同年3月11日までの間実施した。

6）本冊子の執筆は、中西靖人、国乗和雄、赤木克視が分担し、図版の作製は赤木克視、山崎博が行なった。また全体の監修は中西靖人が当った。

7）出土遺物の整理には普及資料室長福岡澄男氏、写真撮影は写真資料室各位の協力を得た。記して感謝する。



第１図　調査地域全景

目　　次

はしがき

例　　言

〔Ⅰ〕調査に至る経過…… 1

〔Ⅱ〕調査の目的と方法…… 1

〔Ⅲ〕遺跡の立地とその周辺遺跡…… 2

〔Ⅳ〕調査の結果…… 4

〔Ⅴ〕まとめ…… 14

大阪文化財センター
蔵書
第　号

図版目次

図版一　瓜破遺跡とその周辺遺跡
図版二　トレンチ設定図
図版三　瓜破遺跡トレンチ
　　（上）第1トレンチ西・北壁
　　（下）第6トレンチ西・北壁
図版四　瓜破遺跡トレンチ
　　（上）第7トレンチ3層下面遺構
　　（下）第7トレンチ西・北壁
図版五　瓜破遺跡トレンチ
　　（上）第8トレンチ4層下面遺構
　　（下）第8トレンチ西壁
図版六　瓜破遺跡出土遺物
　　（上）瓦
　　（下）第6トレンチ
図版七　瓜破遺跡出土遺物
　　（上）第8トレンチ
　　（下）第9トレンチ
図版八　第7トレンチ断面図及び3層下面遺構図
図版九　第8トレンチ断面図及び4層下面遺構図
図版十　地層柱状図

挿図目次

第1図　調査地域全景
第2図　発掘風景
第3図　第6トレンチ遺物実測図
第4図　第6トレンチ遺物実測図
第5図　第8トレンチ遺物実測図

〔Ⅰ〕調査に至る経過

阪神高速道路公団及び大阪府が建設を進めている大阪府道高速大阪～松原線は、大阪市平野区瓜破西之町で瓜破遺跡の推定範囲を通過するものである。

瓜破遺跡は、過去、昭和19年及び昭和20年の両年にわたって山本博氏により大和川床に遺物の散布が認められることが報告され、下って昭和27年、日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会により発掘調査が実施されるにおよんで一躍学会の注目を集める重要な遺跡となったのである。また最近、急速なテンポでこの地域が宅地化するにつれて、関連する公共事業等に伴なう事前調査が、この地周辺で数多く実施されるにおよび、従来考えられていた瓜破遺跡の範囲が、もっと大規模なものであるということが明らかになったのである。

この様な事情をふまえて、大阪府教育委員会及び大阪市教育委員会は、当該道路予定地内に於いても工事着工に先立って、遺跡の拡がり、遺物の有無、遺構の有無、時期、層位関係等の確認調査が必要であるとの指示を阪神高速道路公団に行ない、また、その調査は財団法人大阪文化財センターが実施するのが適当であるとの回答を出した。

この旨指示を受けた阪神高速道路公団は昭和50年12月18日付で財団法人大阪文化財センターに対し、調査の依頼をし、経費、期間、調査方法等について協議をした後、両者は昭和51年１月８日付で受委託の契約を締結した。これによって財団法人大阪文化財センターは昭和51年１月16日より現地に於ける発掘調査に着手したのである。

〔Ⅱ〕調査の目的と方法

今回実施した調査の目的は、瓜破遺跡の範囲確認と、その埋没深度、遺構の有無等を正確に把握することであった。試掘坑は10ヶ所設定されたが、すべて素掘りで行い、壁の崩壊を防止するため６分の法をとった。試掘坑の大きさは上部で５×５ｍ、下部で２×２ｍ、掘削深度は2.5ｍであった。掘削は一切人力で行い、排土はベルト・コンベアーにたよった。調査は上層から順次、層位毎に掘削し、遺構、遺物の検出に努めた。地層断面図は各試掘坑の北壁、西壁の２面を実測し、相互間の対比を容易にするために西壁部の断面を柱状図にした。

また各層位ごとに花粉分析用の土壌サンプルを採取し、将来の研究の資とした。今回の調査では掘削深度が表土下2.5mまでであるため、あるいは合含層に届かない場合も想定され、そのためにハンド・オーガーによるボーリングを適宜行ない、表土下4.50m前後までは層序の把握に努めた。埋戻しは二段階で行なった。まず各試掘坑の調査終了後、ただちに湧水面までを埋戻し、転落事故等の不測の事態の防止を計り、残りの埋戻しは全調査終了後に行なって、原状復旧を成した。埋戻しもすべて人力で行なった。

第2図　発掘風景

〔III〕遺跡の立地と周辺の遺跡

瓜破遺跡は羽曳野丘陵より延びてくる低い舌状台地(瓜破台地)の西斜面裾部、現在の大阪市平野区瓜破西之町の大和川右岸に位置する。この地域は1704年の大和川のつけ変えや、また近年の急激な開発進展によって大きく変容しており、旧地形の名残りをほとんど止めていない。瓜破台地は本来、東除川と西除川の間に挟まれた、北に向って下降する緩斜面の末端近く、幾つかの舌状に枝分かれしていく台地の一つであり、その中では一番大きなものである。比高差はほとんどなく、3～4m程度であり、縁辺部も極めて緩やかな斜面をなしている。瓜破遺跡はその台地の西側斜面裾部、約1km西方に南北に走る西除川、今川が

刻んだ広い谷にそそぐ小谷の左岸に位置する。標高はO.P.10m前後である。層序は厚い沖積層におおわれており、北西に緩やかに下降していく。その傾斜度は1/400である。

瓜破遺跡の周辺の遺跡分布はそれほど多くない。しかしこれは遺跡の埋没深度が深いことや、宅地の増大に伴なう可視地表面積の減小などが、遺跡の発見を遅らせているだけであって、まだ未発見の遺跡が多いためと思われる。昭和49年度に地下鉄工事に先立つ、当文化財センターの試掘調査で発見された長原・城山遺跡などは、その一例であり、この遺跡は瓜破遺跡の東隣の台地上にある。先土器・縄文時代の遺跡はほとんど発見されていない。わずかに先に述べた長原遺跡で、縄文晩期の土器が出土したと伝えられている程度である。また瓜破遺跡でも晩期のものと思われる石棒の破片が発見されているが、どのような性格のものか不明である。石川流域では錦織や国府・船橋遺跡等の著名な遺跡があり、この西除川流域の空白地帯とは明らかな対照を示している。

弥生時代に入るとこの地域には瓜破遺跡が出現する。奈良県田原本の唐古遺跡や、八尾市の山賀遺跡のような一様式の古段階を出土する遺跡よりは後出的な、壺では貼付突帯を、甕では多条な平行沈線を廻らした一様式の新段階の土器を出土する遺跡である。この西除川水系には学史に著名な桑津遺跡が存在する。この遺跡は瓜破遺跡よりは4.5km下流の東住吉区桑津町にあり、上町台地の東斜面に立地する。時期は中期初頭、二様式の新の段階に相当する櫛目文を主体とする遺跡である。一様式新段階の壺形土器も発見されており、瓜破遺跡との関係が注目されるが、両者とも断片的な調査しか行なわれておらず、その集落の構造はいまだ明らかになっていない。昭和49年から50年にかけて本調査された長原・城山遺跡では、中・後期の溝や住居跡・土坑墓等が検出されており、この期の集落構造を知る上で貴重な資料を提供するものと思われ、報告書の刊行が待たれる。古墳時代前期の集落跡としては上田町遺跡が、2.5km南方にある。庄内式土器を出土し、遺構も存在することが確認されているが、その内容は不明である。古墳時代後期に入ると南方1kmに三宅（屯倉）遺跡、3kmには丹比柴垣宮跡のそれぞれ伝承地が存在する。古墳は東南東6kmの古市古墳群、南西6kmの百舌鳥古墳群にはさまれてはいるが、確認されたものは多くなく、空白地帯をなしている。この地域で一際、際だっているのは南東4kmにある河内大塚山古墳である。全長334m、全国で4位の墓模を誇る大前方後円墳である。前方

部は削平され4mほどの高さしかないが、後円部は20mの高さを残しており、比較的旧状を保っている。東方4kmには古市古墳群の北端部を形成する全長202mの城山古墳が存在する。これも墳丘はかなりの破壊を見ている。また1km西には瓜破霊園の中に花塚山古墳とゴマ堂山古墳がある。現在残っている古墳はこの程度のものであるが、この地は早くから開墾が進んでおり、すでに消滅した古墳はかなりの数にのぼるものと思われる。長原遺跡の調査では周溝のみが残存していた大型古墳1基と、小型の方墳が4基検出されており、またこの地域の数多い溜池の中には本体は消滅しても、周溝のみが溜池として利用されている古墳も幾つかあるものと思われる。寺院では瓜破霊園の地に奈良時代前期創建にかかる瓜破廃寺があり、また瓜破東之町の集落内には、大化年中道照法師の創建せし永楽寺の遺跡と伝えられる敬正寺が存在する。

〔Ⅳ〕調査の結果

各トレンチは原則として橋脚部内に設定した。第1トレンチから第5トレンチまでを設定した地域は、平均70cm程度の土盛がなされており、現状はゴルフ練習場の敷地になっている。第6トレンチから第9トレンチまでは水田中に、第10トレンチは旧駒ヶ池中に設定した。各トレンチの橋脚番号との対比は次の通りである。なお橋脚の間隔は一部の例外はあるが25mである。第1トレンチはUP69の中央部、第2トレンチはUP70の中央部、第3トレンチはYP1の東側端、第4トレンチはYP3の南端西寄り、第5トレンチはYP6の北東端、第6トレンチはYP8の西端、第7トレンチはYP10、第8トレンチはYP12、第9トレンチはYP14、第10トレンチはYP16のそれぞれ中央部に設定した。各トレンチの出土遺物は表にしており、また層序は巻末の柱状図（図版十）を参照されたい。なお層序番号は表土（耕土）を1層とし、上から下に順次つけられている。

《第1トレンチ》

旧表土の上に約70cmの瓦礫による土盛がなされており、そのために旧表からの発掘深度は−180cmに止まった。耕土である第1層は土盛時における撹乱が激しく、第2層以下がプライマリーな状態であった。遺物の包含は2〜4層に見られた。出土遺物は下表の通りであるが、すべて細片であり、磨滅が著しい。

時期は明確でないが、おおむね平安時代より鎌倉・室町前後のものと思われる。5層では遺物は検出されなかったが、第3トレンチで同一層と目される灰白色粘土から瓦器等が出土していることから、一概に無遺物層とは断言できない。6層以下は無遺物層であり、整然とした堆積を示している。この地域の層序の示標となるのは茶黒色粘質土と2～3枚の黒色粘土層であるが、第1トレンチでは茶黒色粘質土は6層、黒色粘土は9層、11層、13層に分かれる。茶黒色粘質土は腐植の度合が弱いのか、色が薄くほぼ茶褐色状を呈している。5～9トレンチに見られるような典型的なそれとはやや様相を異にしている。黒色粘土は上層が色が薄く、中・下層は黒色が濃い。第3トレンチ以降に見られる2枚の黒色粘土は、中・下層に対応するものと思われる。

第1トレンチ出土遺物

層序	層名	遺物	時代	形状	備考
2	灰褐色砂質土	土師器	不明		1片　磨滅著しい
		須恵器	〃		〃　〃
		瓦器	〃		2片　〃
3	暗灰褐色砂質土	土師器	〃		1片　〃
		瓦器	鎌倉		1片　〃
4	灰褐色粗砂	土師器	不明		1片　〃
		瓦器	鎌倉		2片　〃
		陶器	中世		1片　〃

《第2トレンチ》

第1トレンチと同様70cmの土盛がなされている。遺物は3～5層より検出された。他のトレンチでは遺物の見られた2層の灰褐色粘質土では、遺物は検出されなかった。第1トレンチで遺物の見られた灰褐色粗砂層（6層）でも、遺物は検出されなかった。また灰白色粘土層は層そのものが存在せず、6層の下はすぐ茶黒色粘質土に移行する。この7層は第1トレンチのものよりはやや色が濃くなっている。黒色粘土の堆積は第1トレンチとほぼ同じ様相を呈しているが、上・中層は層が厚くなっている。

層序	層名	遺物	時代	形状	備考
3	暗灰褐色粘質土	土師器	不明		2片　磨滅著しい
｜	暗灰色粘質土				
5	灰褐色粘質土	瓦器	〃		〃　〃

《第３トレンチ》

やはり70cmの土盛がなされている。遺物は２～５層より検出された。２層は比較的遺物の出土数は多かったが、時期は古式土師器より鎌倉期と思われる瓦器片まで多岐に渡っている。３～５層は堆積に乱れが見られる。３層の暗灰褐色砂質土は、下部に粗砂層がかんでおり、４層とは明瞭には分かれない。４層も南半部は粘質が強くなり、色も明かるい褐色を呈している。また５層は南半部にしか見られない。遺物はそれぞれで検出されたが、ことに５層での出土が多かった。出土したものは終末期の瓦器を含む中世のものと思われ、２層で１片だけ検出された古式土師器は発見されなかった。これらの遺物は細片化され、磨滅が激しく、また出土数も少ない所から他よりの流れ込みと思われる。その下の７層・８層は、８層上面を切り込み面とする川によって強く影響を受けている。川はトレンチ南東部で検出され、南西ー北東方向に流れており、深さは１ｍ前後、巾は不明である。かなりの急流であったのか、やや大粒の礫を含む青灰色の砂礫層が詰まっていた。７層は灰褐色微砂層であるが、下部に行くに従って砂粒が大きくなり、特に川の上部では粗砂層を形成している。９層は茶黒色粘質土であるが、これも１、２トレンチと同様色は薄い。黒色粘土は２層になり、１・２トレンチで見られた上層部に対応する部分は、灰黒色微砂層に変っている。またこの２枚の黒色粘土を挟んでいる青灰色粘土は、他のそれよりは緑色を呈している。

第３トレンチ出土遺物

層序	層名	遺物	時代	形状	備考
2	灰褐色粘質土	土師器	古墳前期		1片　磨滅著しい
		〃	不明		若干　〃
		須恵器	〃		1片　〃
		瓦	〃		2片　〃
		瓦器	〃		4片　〃
		鉄塊	〃		片片　〃
3	暗灰褐色砂質土	土師器	不明		〃　〃
～	暗灰色粘質土	瓦	中世		1片　磨滅著しい
5	暗灰白色粘土	瓦器	鎌倉		若干　〃

《第４トレンチ》

このトレンチは旧表下の攪乱が激しかった。１mにも及ぶ盛土部と表土を除去すると、東端部にそって建物のコンクリート基礎が打たれており、また中央部には南北に走る水道管が布設されていた。この水道管を保護するため、管埋設深度である地表下150cmからは西半部のみを掘削した。遺物は３層での一片を除き出土しなかった。茶黒色粘質土は第３トレンチと比較して40cmも高く、この間にかなりの傾斜面があるものと思われる。この層から下は比較的落ちついた堆積のしかたを示している。西半部のみを掘削したため断面図は西壁のみを実測した。またハンド・オーガーによるボーリングは粗砂層と水のため、トレンチ最終掘削面より－130cmまでに止まった。

第４トレンチ出土遺物

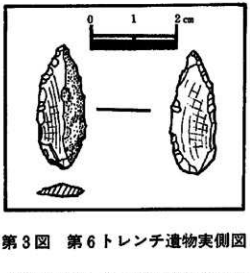
層序	層　　名	遺　物	時　代	形　　状	備　　考
3	暗灰褐色粘質土	土師質土器	中　世		1片　磨滅著しい

《第５トレンチ》

60cmの盛土を除去。この部分の盛土は地下鉄掘削時に出た土を使用しているため、比較的掘りやすいものであった。このトレンチは比較的多量の遺物が出土した。２層では平安末に比定される蓮華紋軒丸瓦片が出土、他に平瓦片３枚も出土しており、近くに寺院跡がある可能性もある。現在の瓜破霊園の地にあったとされる瓜破廃寺や、もっと近く、瓜破東之町にある大化年中、道照法師の創建せし永楽寺の遺蹟と伝えられる敬正寺との関連も考慮に入れる必要があるかも知れない。この他にも古墳時代の須恵器片や鎌倉時代の瓦器片等雑多な遺物が見られた。３層は遺物の出土数が少なく、土釜三足等、中世の遺物がほとんどを占めている。４層はまた遺物数が増える。この層も雑多な時期のものが混在しているが、破片がやや大きく、器形のわかるものが多かった。古墳時代の須恵器甕腹から退化した高台を持つ瓦器椀まで多様なあり方を示している。この下からは無遺物層である。茶黒色粘質土は灰褐色粗砂を間に挟んで上下二層に分けられる。上層は色が薄く、茶褐色状を呈しており、下層が典型的な茶黒色粘質土である。１～４トレンチに見られた色の薄い一連の層は、この上層に対比されるのかも知れない。

第5トレンチ出土遺物

層序	層名	遺物	時代	形状	備考
2	灰褐色粘質土	土師器	不明		若干　磨滅著しい
		須恵器	古墳等	甕	3片　〃
		瓦	平安末	蓮華紋軒丸瓦	1片
		瓦		平瓦	3片　磨滅著しい
		瓦器	鎌倉等		4片　〃
		瓦質土器	中世	壺	若干　タタキ目あり
		土釜	〃		2片　磨滅著しい
		陶器	〃		1片　〃
3	暗灰褐色粘質土	土師器	不明		若干　〃
		瓦器			若干　〃
		土釜	中世	3足	1片　〃
4	黄褐色粘質土	土師器	奈良等	皿?	若干　〃
		須恵器	古墳	甕	1片　〃
		〃	奈良	皿・杯蓋	2片　〃
		瓦	平安	布目	1片　〃
		瓦器	鎌倉		1片　〃



第3図　第6トレンチ遺物実側図

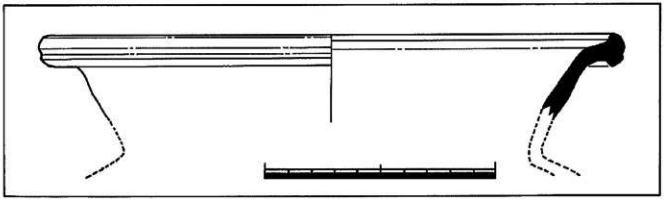
《第6トレンチ》

水田中にトレンチを設定。これより第9トレンチまでは盛土がなく、表土下－250cmまで掘削できた。このトレンチは遺構は存在しなかったが、遺物は豊富であり、遺存状態も比較的良好であった。2層では風化の進んでいないサヌカイトの剝片が1片出土、一部に自然面を残しており、やや縦長の剝離がなされた不整形なものである。4層で出土した石鏃と関連があるのかも知れない。この層は近世の陶器片の出土もあり、土器片の磨滅も激しく細片化されている。3・4層は遺物の出土数も多く、時期も弥生時代の物と思われる石鏃様の石器から近世の瓦まで多岐に渡っている。石鏃はやや風化の進んだサヌカイト製の小型のものであり、全長は2.8cm、一部に自然面を残した粗雑な作りのものである。遺物の混在のしかたは第5トレンチと同様のあり方を示している。5層は遺物の紛れが少なく破片

も大きい。6世紀中頃と思われるやや退化した耳を持つ提瓶は同一個体が4片見つかっており、この層の遺物はそれほど旧位置を動いていないものと思われる。出土遺物の下限も奈良時代であり、時期も比較的限定されている。このトレンチの黒色粘土は上下層が極めて接近しており、間に10cmほどの青灰色微砂層を挟むだけであった。これはその下にある青灰色粘土の堆積が厚く、黒色粘土形成期には微高地状になっていたためと思われる。

第6トレンチ出土遺物

層序	層名	遺物	時代	形状	備考
2	灰褐色粘質土	サヌカイト	不明	剝片	1片
		土師器	奈良等	杯	若干　磨滅著しい
		須恵器	平安等	壺・片口鉢	3片　〃
		瓦器	不明		若干　〃
		陶器	近世		4片　〃
3	暗灰褐色粘質土	石鏃	弥生？		1本
～	黄褐色粘質土	土師器	不明	甕	2片　磨滅著しい
4		須恵器	6世紀	甕	3片　〃
		瓦	平安末		1片　〃
		瓦	中世		〃　〃
		瓦	近世		〃　〃
		瓦器	鎌倉等		若干　〃
		陶器	中世		1片　〃
5	灰褐色粘質土	土師器	奈良	皿	若干　〃
		須恵器	6世紀	提瓶	4片（同一個体）
		土師質土器	奈良	鍋・羽釜	3片



第4図　第6トレンチ出土遺物実側図

《第7トレンチ》

このトレンチでも弥生時代から近世までの雑多な遺物が多く出土した。表土のレベルはほぼ同じでも、層そのものが第6トレンチと対比して全対的にかなり上昇してきており、茶黒色粘質土では25cmの差がある。そのため包含層も圧迫されており、第6トレンチで見られた比較的時期の限定された遺物を持つ層は存在しなかった。2・3層では弥生中期・後期の土器、各1片が出土しており、今回の調査では第8トレンチでの1片とともに数少ない例である。ここではサヌカイトの剝片も出土している。また3層下面から茶黒色粘質土に切り込まれたピットが3個検出された。遺物の伴う遺構は今回の調査では唯一ここだけに見られた。このピットは140cmの等間隔で、北東－南西方向に一直線に並んでおり、ピットの形は不整形である。南西側から順次1・2・3とすると、ピット1は長径38cm、短径32cm、深さは17cmでほぼ円型のプランを持っている。ピット2は長径35cm、短径33cm、深さは14cm、ほぼ方形をしており、ピット3は長径37cm、短径30cm、深さは18cm、不整形なプランをしている。覆土はピット1・ピット2が灰茶色の砂粒まじりの粘質土が入っており、ピット3の土はそれよりは褐色が強いものであった。遺物はピット2・3の覆土中より布留式と思われる古式土師器の細片が若干出ており、この時期のものと思われるが、ピット外ではこの時期に比定される土器は出ておらず、断言は出来ない。このピットは柱穴と思われるが、柱根部が検出されなかったことと、またこの三本に対応するピットがこのトレンチ内では見つからなかった所から、建築遺構であるとの確証も得られなかった。茶黒色粘質土は耕土下30cmの浅さにあり、厚さも15cm程度のものである。この層の下から黒色粘土の上面までは粘土と粗砂との互層であり、かなり乱れた堆積を示している。黒色粘土のレベルはますます高くなり、青灰色粘土も一番厚くなっている。上層の黒色粘土下面には10～20cm程度の不整形な浅い落ち込みが幾つか見られたが、人為的なものとは思われなかった。また下層でも北東－南西方向に走る巾広く浅い溝状の落ち込みが見られたが、これも同様人為的なものとは思われなかった。

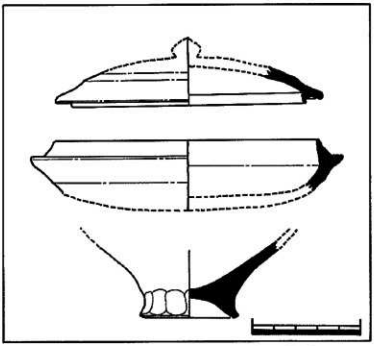
第7トレンチ出土遺物

層序	層名	遺物	時代	形状	備考
2	灰褐色粘質土	土師器	奈良等	杯	若干 磨滅著しい
		須恵器	平安末等	片口鉢	2片 〃

2	灰褐色粘質土	瓦	近　世		1片　磨滅著しい
		瓦　器	不　明		若干　〃
		土　釜	中　世		2片　〃
		陶　器	近　世		若干　〃
		磁　器	近　世	染付	2片
3	暗灰褐色粘質土	サヌカイト	弥　生？	剥片	1片
		弥生式土器	中　期		〃　磨滅著しい
		土　師　器	奈　良　等	杯・土釜	若干　〃
		須　恵　器	6世紀～奈良	杯・壺・甕	4片　〃
		黒色土器	平安　（？）		若干　〃
		瓦	平安末以降		〃　〃
		瓦　器	鎌　倉　等		〃　〃
		陶　器	中　世		〃　〃
		土　師　器	古墳前期		布留式　ピット内

《第8トレンチ》

このトレンチを設定した水田面は、6・7トレンチのそれよりも一段高くなっており、その比高差は40cmである。茶黒色粘質土の対比でもやはり40cmのレベル差があり、旧地形が南より北に向って緩やかに傾斜していくことを示している。遺物の出土は比較的多かった。2・3層では6世紀から7世紀にかけての須恵器片から近世初頭の天目茶碗まで、雑多な遺物を含んでいた。しかし7トレンチのピット内に見られた古式土師器は出土しなかった。この下の茶黒色粘質土（4層）に比較的時期の限定された土器の包含が見られた。この層で遺物の見つかったのは、ここと第9トレンチだけである。しかし遺物の出土は層上部5cmほどに限られており、量も極めて少なく、弥生時代後期の鉢



第5図　第8トレンチ出土遺物実側図

片と土師器片若干だけであった。時期は弥生時代より古墳時代までに限定できるであろう。この茶黒色粘質土の下に灰褐色微砂層を切り込んで性格不明の遺構が存在した。トレンチ北半部に北に向けて10cmほどの段状の落ち込みがあり、上の茶黒色粘質土よりはやや色の薄い粘質土が埋入していた。そしてさらにその土を除去すると、黒色粘質土のつまったピットや溝状遺構が存在した。これらはいずれも不整形で浅いものであった。遺構内では遺物は出土せず、また4層最上部に包含されていた土器とは関係がないものと思われ、時期、性格とも不明である。このトレンチの黒色粘土層は一層しかなく、しかも他のトレンチの黒色粘土層とくらべてレベルが高い。この層の1～7トレンチに見られた黒色粘土との対応関係は不明である。というのは後述する第9トレンチで検出された川の続きが、最下層にある青灰色粗砂層であるならば、第9トレンチでは黒色粘土の上の青灰色微砂層の中に川の切り込み面があり、このトレンチの黒色粘土とは明らかに時期が異なるからである。この層はあるいは1・2トレンチで見られた3枚の黒色粘土層の内の上層部に対応するのかも知れない。黒色粘土の下は青灰色粘土を挟んで厚い青灰色粗砂層になり、第9トレンチで検出された川の中心部を掘ったのではないかと思われる。

第8トレンチ出土遺物

層序	層名	遺物	時代	形状	備考
2	灰褐色粘質土	土釜	不明	土師質	1片 磨滅著しい
～		須恵器	6～7世紀	杯身・杯蓋・甕	4片 〃
3	暗灰褐色粘質土	瓦	平安末～鎌倉	須恵質の布目瓦	若干 〃
		瓦器	鎌倉	椀	〃 〃
		瓦質土器	不明	壺	1片 〃
		天目碗	近世初頭		1片 〃
		磁器	近世		若干
4	茶黒色粘質土	弥生式土器	後期	鉢	1片 磨滅著しい
		土師器	不明		若干 〃

《第9トレンチ》

第8トレンチと同一水田にトレンチを設定したため、表土のレベル差はほとんどない。これは茶黒色粘質土のレベルで見ても、5cmほど第8トレンチの方が高いだけであり、ほぼ平坦になっている。遺物の出土状態は第8トレンチと同様であるが、弥生時代の遺物は発見されなかった。2層では寛永通宝等の近

世遺物が多かったが、時期不詳な須恵器、土師器等も若干出土している。3層は遺物の出土数は少なかったが、7世紀代の土師器甕片から鎌倉期の瓦器片まで、比較的時期の紛れが少なかった。4層の茶黒色粘質土では最上部でのみ古墳時代と思われる数片の土師器が出土した。しかしこの層の下部では全く遺物が見られなかった。この土器を包含する上部と無遺物の下部を層位的に分けることはできなかったが、強いて分けるならば、包含層の部分は粘質が強く、下部は砂粒分に富んでいた。その下の黒色粘質砂土には径20cmほどの不整形な浅いピットがあったが、人為的なものとは思われなかった。表土下1m程度から厚い暗青灰色の微砂層になり、粘質土を互層に持つ上部（8層）と粗砂層をブロック状に持つ下部（9層）に分けられる。下部は表土下2m前後から東に急激に落ち込んでいき、川の様相を呈しており下に行くにしたがって砂粒が荒くなる。東南部では特に顕著で、湧水が激しく壁の崩壊に悩まされた。この川の方向は南南東－北北西であり、水は南から北へ流れていたものと思われる。この川の幅、深さ共に不明である。この川の切り込み面は肩部か完全に出ていないので断言は出来ないが、9層上面がそれに相当するものであろう。この川によって削平されている2枚の黒色粘土は、ややレベルが下がっているが、3枚の黒色粘土のうちの中、下層に対応するものと思われる。この粘土層は比較的植物遺体に富んでいた。

第9トレンチ出土遺物

層序	層名	遺物	時代	形状	備考
2	灰褐色粘質土	土師器	不明		若干　磨滅著しい
		須恵器	〃		3片　〃
		瓦	中世以降		若干　〃
		瓦器	不明		若干　〃
		陶磁器	中・近世	摺鉢	若干
		寛永通宝	江戸		1枚
3	暗灰褐色粘質土	土師器	7世紀	甕	若干　磨滅著しい
		須恵器	奈良	壺	1片　〃
		瓦器	鎌倉		若干　〃
4	茶黒色粘風土	土師器	古墳？		4片　〃

《第10トレンチ》

旧駒ヶ池中にトレンチを設定。池は瓦礫による埋立てを行っており、掘削は困難を極めた。130cmまで掘削した段階で、更に下に試掘坑を50cmほど下げて見たが、依然瓦礫の層であり、また旧水面のレベルに達したのか出水が激しくこれ以上の掘削は断念せざるを得なかった。

〔V〕ま と め

瓜破遺跡の本格的な発掘調査は昭和27年、日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会の手によって実施されたのみであるといって過言ではない。この調査結果は36年『日本農耕文化の生成』としてまとめられている。この報告書の記述によれば、上述の調査地点は、瓜破西之町の水門の西側30mとあり、この水門が現存する駒ヶ谷樋門であろうことから、今回調査したNo.10トレンチは150m程度東にあたると思われる。しかしながら大阪府教育委員会の作製になる1/10,000遺跡分布図には、現高野大橋より東側に中心部があるごとく記されており、当時の報告とはその位置が異なっている。このことはさておくとして、今回の調査では、当初は多量の弥生式土器の出土が予想され、また弥生時代以降の包含層乃至遺構の存在も充分予想されたのであった。

しかしながら、調査を実施してみると各トレンチからはほとんど遺物らしいものは検出されず、わずかに出土した遺物も大部分は磨滅が激しいものである。さらに同一包含層の中より検出された遺物の時期も、弥生式土器、石器から中・近世の陶磁器片までを含んでおり、一時期の単純な層位としての包含層は存在しない。また瓜破遺跡の中心的な時期としての弥生時代前期、の遺物は皆無である。この点に関しては、今回の調査の人力による掘削深度が素掘りであったため浅く、当時の生活の面まで達していない可能性もある。しかし下層確認のためのハンドオーガによるボーリング調査の結果でも包含層らしいものしら認めることが出来なかったことからも、当該ルート下には弥生時代前期の包含層は存在しない可能性が強いと云わざるを得ない。

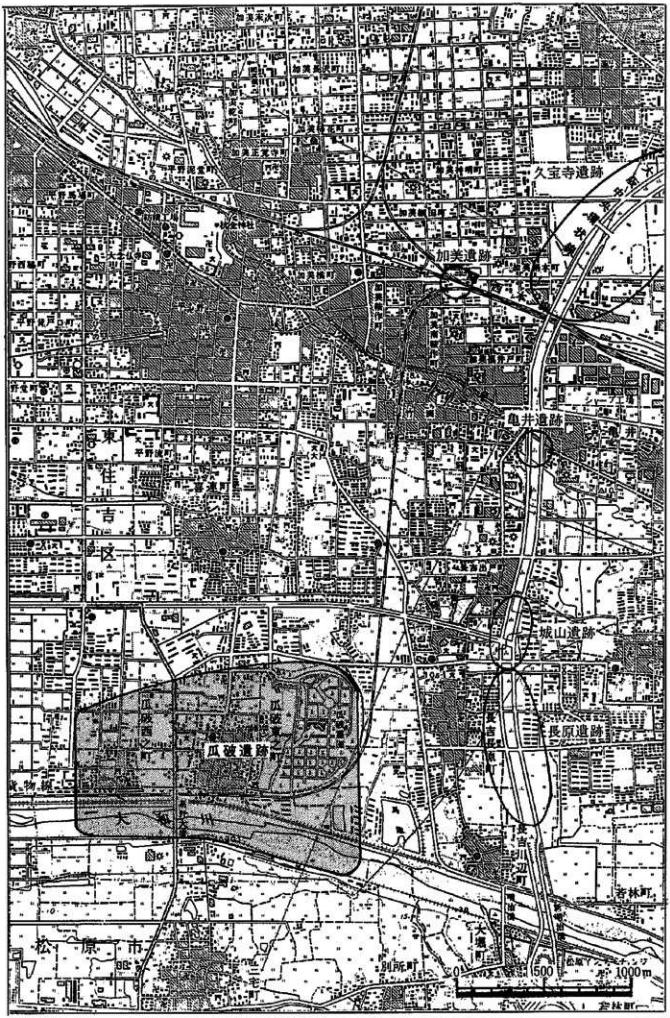
また、No.1、No.2、No.4、No.10の各トレンチを除くトレンチからは平安末～近世に至る時期の瓦片が数片づつ検出されたが、時期的にまとまったものではなく、且つ、量的にも小量なこともあって、当該ルート近辺に古代末から中世

にかけての寺院等が存在したとは今回の調査結果のみでは判断し得ない。

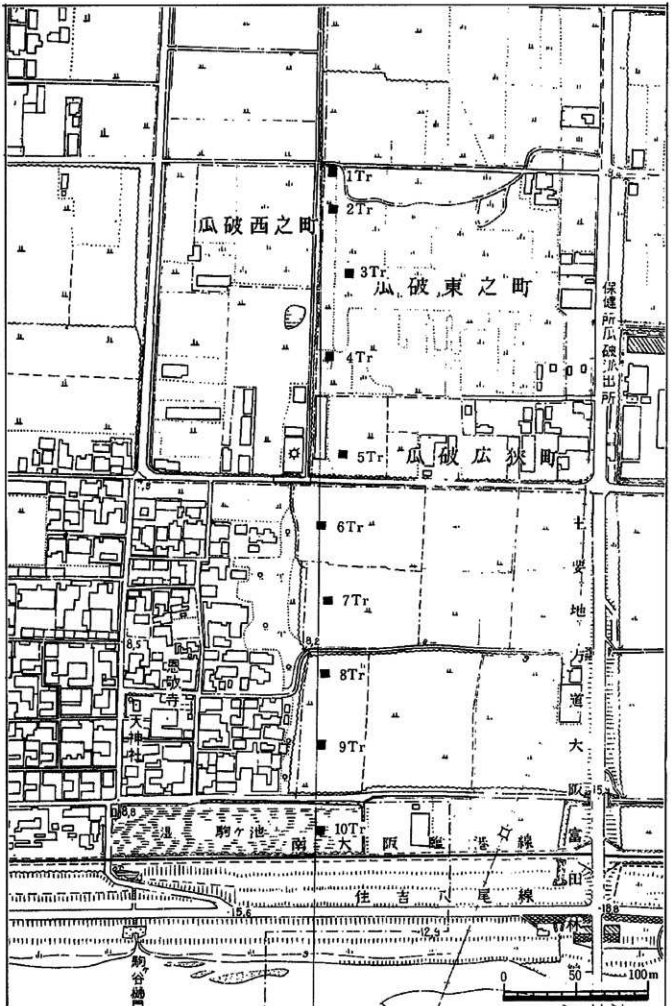
最後に今回の調査結果の概略をまとめるとするなら、No.1～No.4トレンチは遺物の出土量も少なく、遺構も存在しなかいが、No.5～No.9トレンチの間は、包含層の遺物の量は少量ではあるが比較的まとまった出かたを示しており、さらにNo.7トレンチでは布留式土器を伴なう柱穴、No.8トレンチでは溝状の落込みと柱穴らしきものが検出されていることから、今後の取り扱いに関しては慎重に検討される必要があると考える。さらに、No.10トレンチは以前に池であり、その埋土が不良であったため計画どおりの掘削は出来ず、且つボーリング調査も不可能であった。しかし、当該トレンチが、昭和27年度の調査地点に一番近いことから、旧池底より下に包含層の存在する可能性も捨てきれない。

図　　版

図版一　瓜破遺跡とその周辺遺跡



図版二　トレンチ設定図

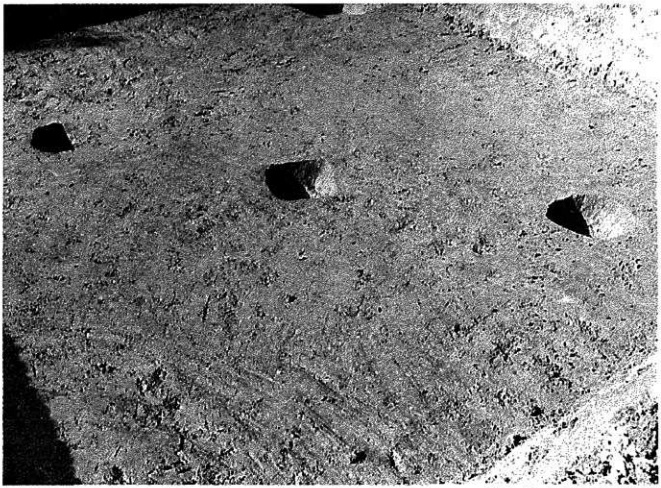

1Tr
2Tr
3Tr
4Tr
5Tr
6Tr
7Tr
8Tr
9Tr
10Tr
瓜破西之町
瓜破東之町
瓜破広狭町
保健所瓜破派出所
土塀地
大道
恩敬寺
天神社
駒ケ池
池
南大阪
阪堺電鉄線
富田林
住吉八尾線
駒谷橋門
0
50
100m

図版三　瓜破遺跡トレンチ

第1トレンチ西・北壁

第6トレンチ西・北壁

図版四　瓜破遺跡トレンチ

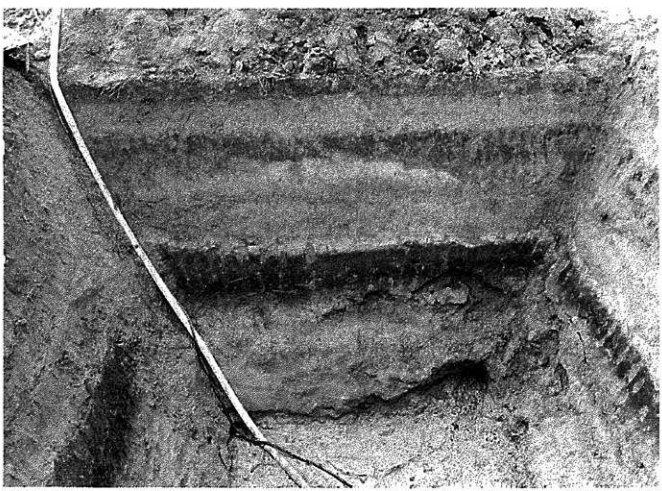


第７トレンチ３層下面遺構

第７トレンチ西・北壁

図版五　瓜破遺跡トレンチ

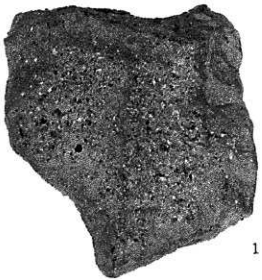
第８トレンチ４層下面遺構

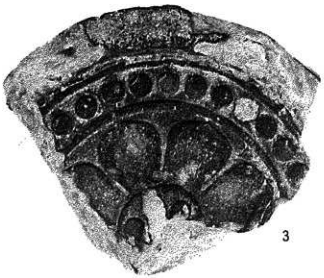


第８トレンチ西壁

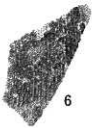
図版六　瓜破遺跡出土遺物

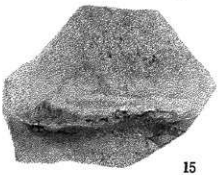
瓦（上）　第6トレンチ（下）





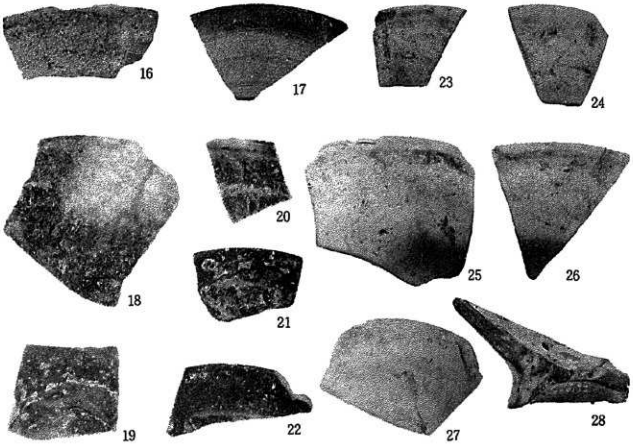
第5トレンチ（3）　第6トレンチ（1．2．4）



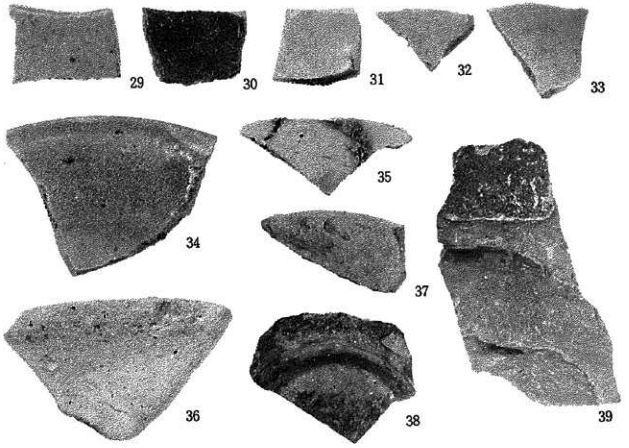


須恵器（5～10）　瓦器（11）　磁器（12）　土師器（13）　土釜（14．15）

図版七　瓜破遺跡出土遺物　第8トレンチ(上)　第9トレンチ(下)

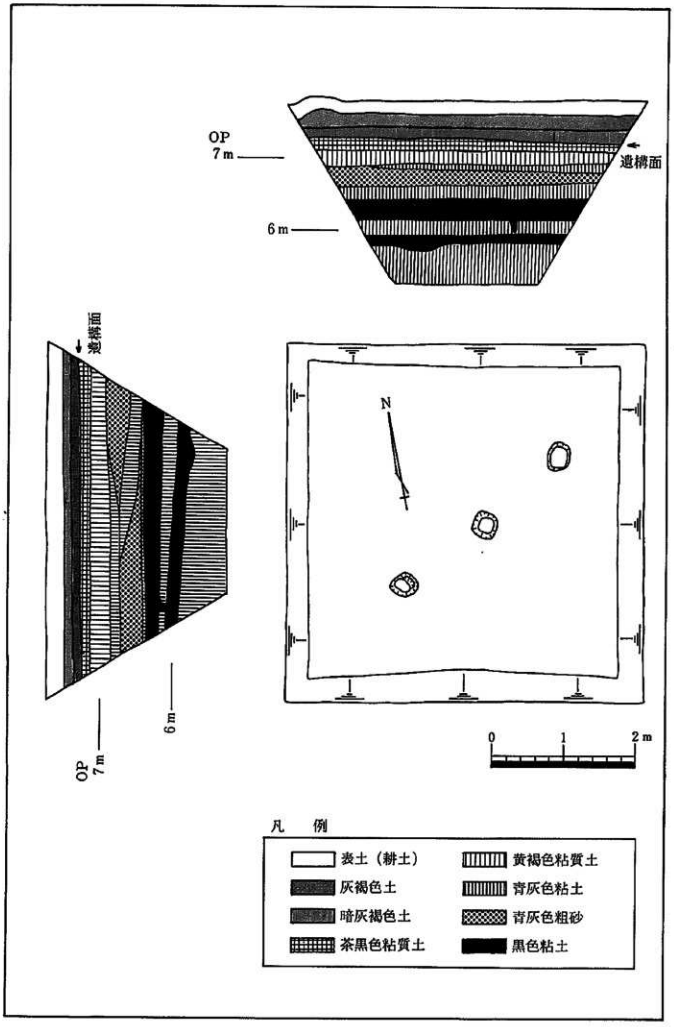


須恵器(16.17)　瓦器(18～22)　土師器(23～28)

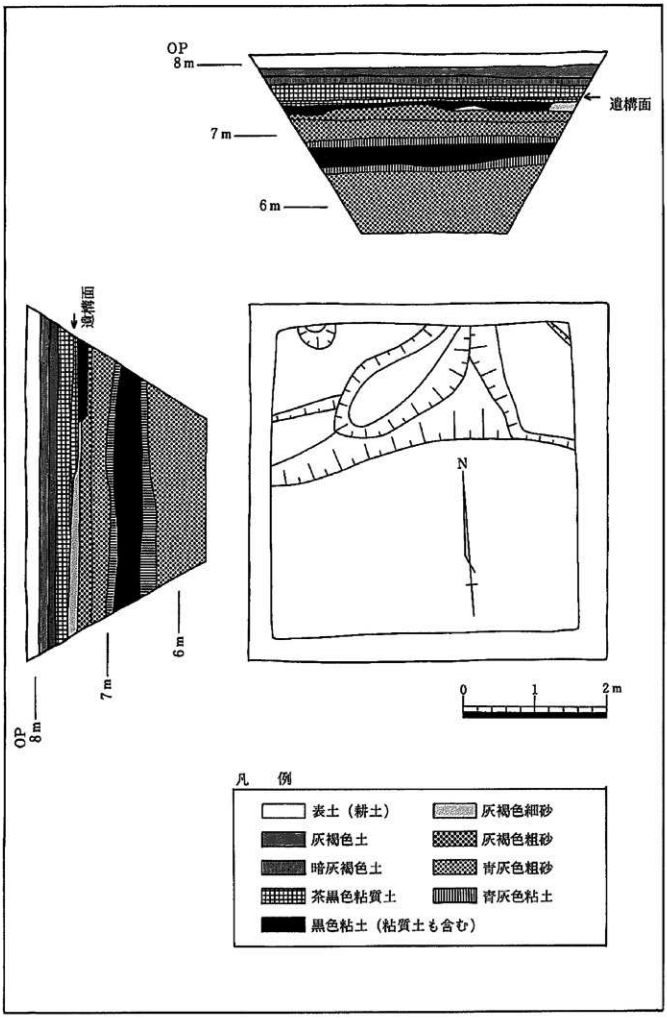


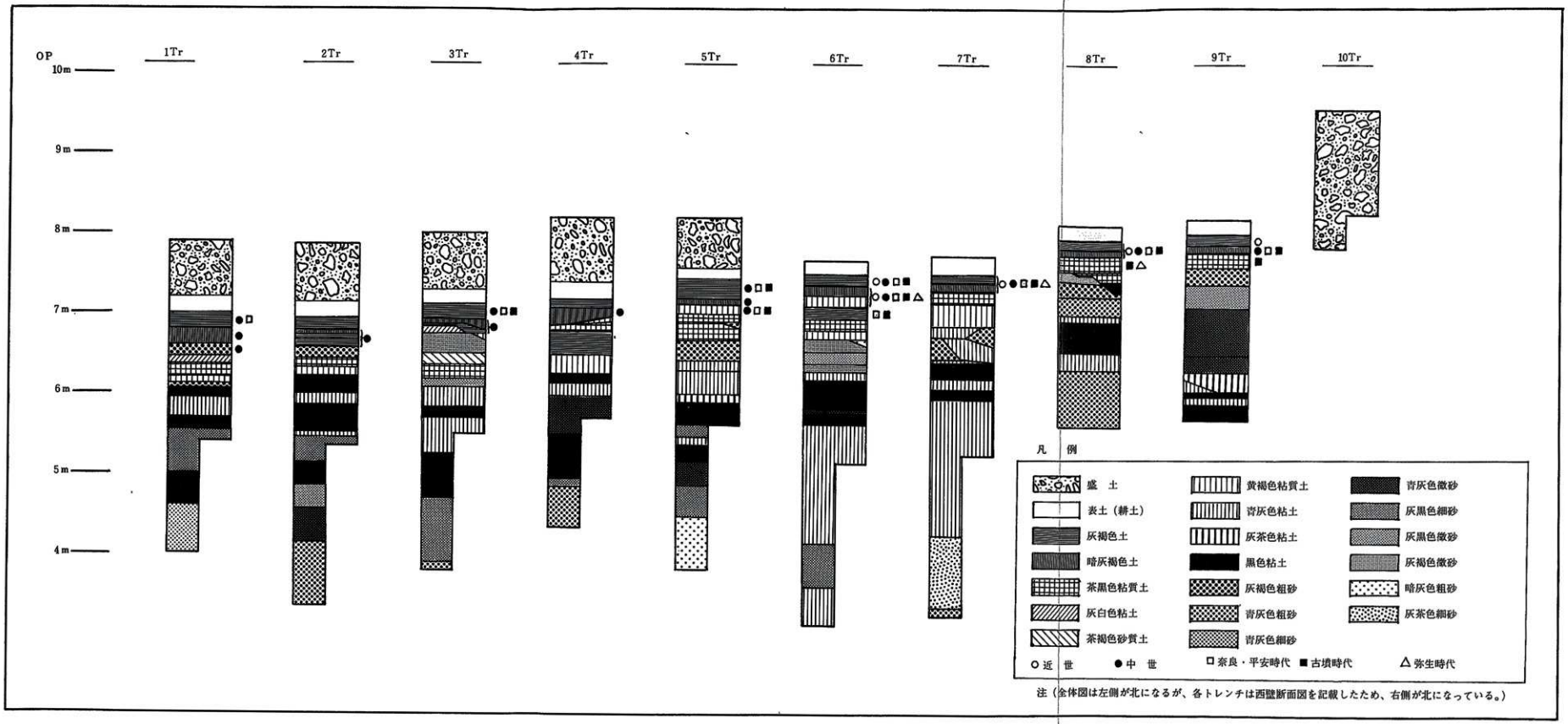
磁器(29～35)　土師器(36.37)　須恵器(38.39)

図版八　第7トレンチ断面図及び3層下面遺構図



図版九　第8トレンチ断面図及び4層下面遺構図





注（全体図は左側が北になるが、各トレンチは西壁断面図を記載したため、右側が北になっている。）